

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2010年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 21世紀社会デザイン 研究科 比較組織ネットワーク学 専攻		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科 博士課程後期課程 1年	小関 孝子 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	経営学部 21世紀社会デザイン研究科	笠原 清志 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	社会	<b>個人・共同の別</b>	個人
<b>研究課題名</b>	「全国友の会」研究		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
<b>研究期間</b>	2010 年度		
<b>研究経費</b>	200 千円		

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

「全国友の会」は、羽仁もと子によって1930年に創設された主婦を中心とした任意団体である。2010年には創立80周年を迎えた。会員たちは、婦人雑誌『婦人之友』の愛読者が中心とした一般の主婦であり、2010年3月現在、全国に約20,000人の会員を持ち、188の各地「友の会」が存在している。この組織は今まで本格的な学術研究の対象となってきたおらず、本研究が「全国友の会」そのものを研究対象とした初めての研究である。

2010年度の研究活動では、「全国友の会」社会的役割及び女性組織のエンパワーメントを検証するために、「全国友の会」の阪神・淡路大震災救援活動がいかに迅速かつ、組織的に行われたのか、また、彼女たちが震災直後から災害ボランティアに参加した理由はどこにあるのかを、現地調査ならびに当事者インタビューを実施した。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 全国友の会 ] [ 主婦 ] [ 羽仁もと子 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究の目的】**

「全国友の会」研究を通じて、近代化の流れの中で始まった「生活合理化」という思想が、社会にどのような影響を与えたのか、また、社会のどの部分の影響を受けて変容したのかについて研究する。創立以来 80 年間活動を継続している「全国友の会」という任意団体が、時代とともに「生活合理化」の解釈を変えながら、いかにしなやかに、そしてしたたかに生き延びてきたのかを分析し、組織の柔軟性と危うさを解明したい。

「全国友の会」の組織継続の最大の要因は、イデオロギー的にどの時代においても常に中庸であったこと、つまり、どの時代も権力と絶妙な距離を保っていたことであろう。権力と絶妙な距離を無意識に保つことができたのは、羽仁もと子思想の背景にあるキリスト教的エートスであり、生活という万人に共通の「実践」によると思われる。

**【2010 年度の研究成果】**

2010 年度は、「全国友の会」の歴史における始まりと今、つまり、「全国友の会」の創立期と、現在の活動という 2 つの時期を対象に研究を行った。今後、さらなる研究によって、この両者をつないでいくつもりである。

**(1) 創立期の研究成果**

「全国友の会」の創立期の研究については、その成果を学会で発表した。タイトルは「「全国友の会」創立の経緯と時代背景」である。昭和 5 年創立から 80 年に以上も続く任意団体がどのように誕生したのか、現在の市民組織への示唆的な事象を整理・分析した。発表のポイントは、①「全国友の会」の前身、婦人之友読者組合がどのように誕生したのか。②婦人之友読者組合がどのように「全国友の会」へと変化したのか。③「全国友の会」はどのように全国に広がったのか、という 3 つである。

まず、前身の婦人之友読者組合の誕生については、明治後期～大正時代に発行されていた婦人雑誌『婦女界』と『主婦之友』の読者組織と比較をし、婦人之友読者組合は読者同志が共の学ぶ場を提供する共同体形成型であったことを指摘した。また、読者の組織化を試みたこの 3 誌の編集者は、一時は共に婦人之友の編集に携わるなど、交流があったという点は、今後の研究テーマとしても興味深い。

次に、読者組合が「全国友の会」へと変化するプロセスでは、中央組織が誕生する前に各地方に様々な規模の友の会が自発的に誕生していたということを重視し、地方組織の連合体として全国組織で誕生した点を指摘した。「全国友の会」と各地友の会の関係は、現在においても、中央行政と地方行政のような関係であり、各地友の会は自治組織となっているのである。

そして、「全国友の会」が創立後、全国に広がっていった要因については、「家庭生活合理化展覧会」という催しが全国と巡回したことによる生活合理化ビジョンの共有と宣伝効果、この催しを運営することを通じて各地友の会の会員の結束が強固になったこと、催しの成功によって各地友の会が活動資金を得たことを指摘した。

これらの研究成果は、今後論文にまとめるつもりである。

**(2) 現在の活動の研究成果～阪神・淡路大震災救援活動の調査～**

阪神・淡路大震災救援活動の調査は、本研究の中では、現在の活動の調査という位置づけである。「全国友の会」が、単なる家事家計の勉強サークルではないという点、創設者羽仁もと子の思想が今も会員に息づいているという点を実証するためには、災害時の全国友の会の活動を調査する必要があると考えているからである。生活合理化思想が約 100 年の間に変容し、21 世紀には、危機管理型生活思想となっていくのではないかという仮説を持っている。(※次頁へつづく)

**研究成果の概要 つづき**

阪神・淡路大震災救援活動の調査は、まず記録を基にした論文を執筆し、1回目の阪神地区出張で資料収集と予備調査を行い、2回目の阪神地区出張で、当事者インタビューを行った。(インタビューは東日本大震災の一週間前である。)

論文執筆と予備調査で生じた疑問を、インタビューで調査した。その疑問とは、①友の会の救援活動は、行政や他の組織とどのように連携していたのか、または連携していなかったのか、②記録には、行政から「行政の目の届かない避難所以外のところへ、救援物資を届けて欲しい」との要望があったとあるが、それらの人々をどのように捜したのか、③中継地点として活躍した大阪友の家の設備の充実度、という3点である。

行政や他組織との連携という点については、「神戸友の会」と「西宮友の会」では回答が異なった。「神戸友の会」では、避難所では配布できない数の足りない救援物資を、被災者に届けていた。避難所では配給物資が全員に行き渡らない場合、不公平が生じるので、貴重な物資であっても行政の立場では配布できない。それらが、任意団体である友の会に送られてきたそうである。「西宮友の会」では、独自の救援活動が展開されており、避難所を中心に積極的な活動を展開していた西宮ボランティアネットワークとの連携はみられなかった。

避難所以外の場所にいる被災者をどのように捜したか、という質問については、自分たちで捜しに行ったという回答が得られた。NPO 法人共働学舎の創設者である宮嶋真一郎氏が震災から6日後に神戸入りし、宮嶋氏のリーダーシップのもと「困っている人がどこにいるのか、捜しに行った」そうである。救援活動初動期におけるリーダーシップについては、さらなる考察が必要である。

大阪友の会のインタビューでは、会員が家族総動員で救援活動に奔走したことがわかった。当時の大阪友の会リーダーが震災直後から現地入りし、約1ヶ月家を空けたが、その間留守宅には会員から夕飯の差し入れが届いたそうである。また、ガスコンロやビニールシートの買出しには、会員の夫が車を出すなど、会員の救援活動を協力する家族の様子を知ることができた。

友の会という組織が地縁組織でもあるという点、会員同士の密度の濃さが、救援活動にどのように活かされたのかについては、今後のさらなる研究によって解明していきたい。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① □ 雑誌論文**

小関孝子「「全国友の会」の阪神・淡路大震災救援活動 ～なぜ、迅速な対応が可能だったのか～」、『Social Design Review』、Vol.2、2010、p92-100

小関孝子「「全国友の会」研究 ～入会者数の変化と社会的要因に関する考察～」、『21世紀社会デザイン研究』、第9号、2011、p59-68

**② □ 図書**

該当なし

**③ □ シンポジウム等の開催**

該当なし

**④ □ その他**

学会発表

「「全国友の会」創立の経緯と時代背景 —『婦人之友』読者は、どのように組織化されたのか—」(2010年12月5日、第5回21世紀社会デザイン研究学会 自由論題発表)